

N-028

# 大学入学直後のコンピュータスキル把握に向けた試み

## A Trial for Getting to Know the Computer Skills of University Freshmen Immediately After Entrance

飯塚 重善<sup>†</sup>  
Shigeyoshi Iizuka

### 1. はじめに

1980年代後半くらいから広く一般に普及し始めたパソコン(以下、PC)およびワープロ・表計算等のソフトウェアことを皮切りに、これらの利用を主眼に置いた「情報リテラシー教育」が台頭した。さらに、1990年代後半くらいから、インターネットが爆発的に普及したことで、新たな情報教育が必要になってきた。このような多様なサービスが展開されてきている現代社会においては、情報に関する知識やスキルが必要不可欠である。大学においても情報技術の利活用が進んでおり、卒業後のニーズに応じた知識・スキルを獲得させるだけでなく、履修登録等、在学中の大学生活のためにも情報教育が展開されてきている。このように、情報技術の進歩は文系学部の情報教育にも大きな影響を及ぼしてきた。筆者が所属する経営学部においても、高度情報社会における経営知識・ビジネス知識を身につける上で情報教育が不可欠であるという認識にもとづいて、情報教育に積極的に取り組んでいる。

また、家庭や学校へのコンピュータの普及により、大学入学時にある程度のコンピュータ知識を持った学生が多くなり、情報教育への期待はより多様になってきた。文系大学・学部における情報関係科目は、1990年代後半より情報処理能力の育成を目指して導入されてきたものの、社会的な情報リテラシーの向上や、高等学校教科「情報」の設置などで、情報処理能力の育成は必ずしも大学で専門的に行われるものではなくなってきた[1]。そもそも、大学における情報教育と教育の情報化を考えるには、学生の「情報」についての実態を把握することが必要であり、これまでにも、学生、とりわけ学部新入生の高等学校までの「情報」に関する学習状況、スキルの獲得状況、学生個人の情報環境などを調査してきており[1]～[6]、多くの文系学部では、情報教育のカリキュラムを、初級レベルと上級レベルとにわけて行っていることが多い。

本稿では、神奈川大学経営学部の新入生を対象に実施している情報リテラシー教育に関する授業のクラス分けの方法を示すとともに、クラス(レベル)分けに関する新たな試みについて示す。

### 2. 従来の方法

神奈川大学経営学部では、基本的な情報利用技術を習得することを目的としている『コンピュータ基礎演習』を年度前期に開講している。この授業において、これまでにもいわゆる“レベル分け”は実施されてきた。本章では、その内容を示す。

<sup>†</sup> 神奈川大学, Kanagawa University

表1 調査の概要

	調査1	調査2
対象	神奈川大学経営学部新入生全員	
方法	「新入生オリエンテーション」時に、アンケート用紙を配布し、その場で回答、回収	全学規模で運用しているLMS(Learning Management System)のアンケート機能を用いて、各自の都合のつく時間に回答
時期	2010年/2011年入学直後(4月2日)	2011年前期授業開始後第1週目
項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>情報教育を受けた時期</li> <li>受けた教育内容</li> <li>「役に立っているか」等の主観</li> <li>利用環境</li> <li>保有資格</li> <li>出資学科</li> <li>高校での受講「情報」種別</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>PC教育経験</li> <li>PC所有</li> <li>ソフトウェア使用経験(アプリケーション種別ごと)</li> <li>OSの使用</li> <li>インターネット関連の機能の利用可否</li> <li>ワープロの機能利用可否</li> <li>エクセルの機能利用可否</li> </ul>

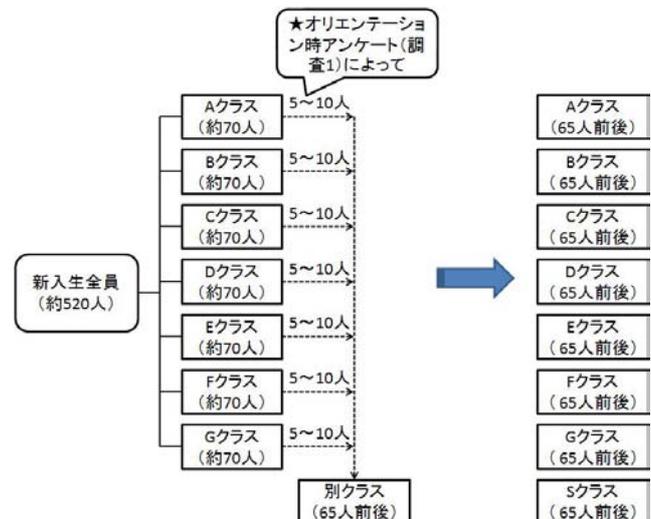


図2 従来のクラス分け方法

#### 2.1 調査

神奈川大学経営学部では、新入生の「情報」についての実態を把握するために、新入生オリエンテーション時

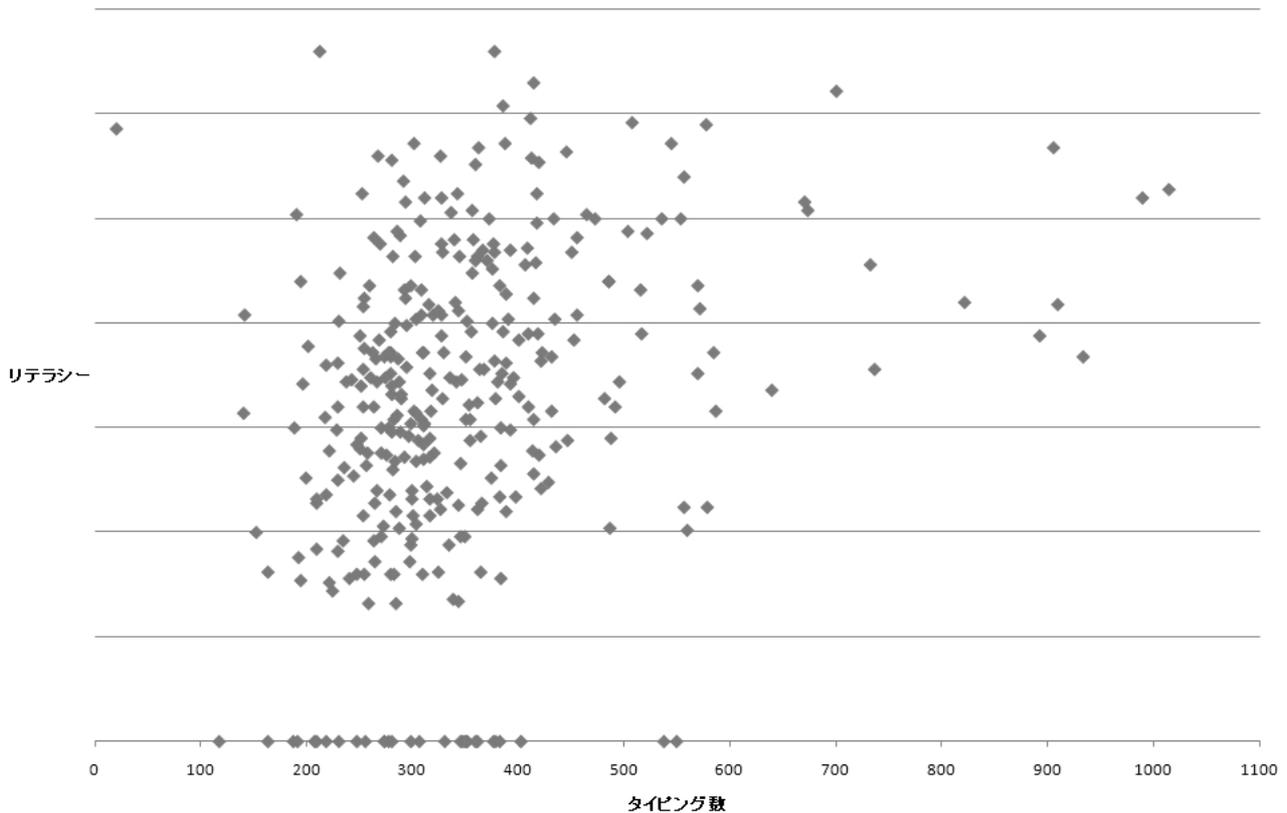


図2 タイピング文字数とリテラシーとの関係

に、アンケート形式で調査を行っている。調査の概要を表1に示す。

## 2.2 クラス分け方法

図1に示すように、2010年度までは、この『コンピュータ基礎演習』のクラス分けにおいて、前章で示したオリエンテーション時のアンケート調査の結果から、情報関連およびワープロ関連の有資格者を60名前後抽出し、「上級クラス」として独立させ、計8クラスに分けていた。

## 3. クラス分けに関する新たな試み

実際には、五百数十名の学生から、知識系の資格を持つごく一部(60名前後)の学生を除いただけの状況で、スキルの平滑化ができていたとは言い難い。そこで、それまでとは異なる方法を用いて、学生のスキルに合わせた授業運営が行えるよう、できる限り、クラス内学生のスキルの平滑化に努めることとした。

そこで、『コンピュータ基礎演習』の第1回目授業にて、MS-Wordを使った文字タイピング力調査を行うこととした。具体的には、サンプルとなる文章を渡し、制限時間(10分)内にその文章を忠実に、できるだけ多く入力するよう指示を出した。その入力できた文字数を基にしてクラス分けを行うこととした。さらに、コンピュータリテラシーに関する実態をより詳細に把握するためのアンケートも行った(表1中の調査2)。

調査2によって申告された情報リテラシーを点数化した結果と、上記タイピング力調査の結果(タイピング数)との関係を図2に示す。

## 4. おわりに

本稿では、神大学経営学部の新入生の情報リテラシー教育に関する授業のクラス分け方法を示すとともに、それに関する新たな試みについて示した。これはまだ、文系学部学生の情報教育において、多様な学生により合った情報教育を実施していくための第一歩に過ぎない。今回の試みの結果を踏まえ、さらに検討を進めていかなければいけない。

### 参考文献

- [1]坂田 哲人, 濱野 和人, 柏木 将宏, “初年次教育としての情報リテラシー教育 -CUCにおける情報基礎の変遷を通じて-”, 千葉商大紀要, Vol.47, No.1 (2009).
- [2]小池 俊隆, 寺島 和夫, 野間 圭介, “大学新入生のコンピュータリテラシー, 情報リテラシーについて -龍谷大学経営学部新入生の場合-”, 経営学論集, Vol.48, No.4 (2009).
- [3]村上 広一, 山崎 初夫, 寺田 幸正, “大学入学時のコンピュータスキルの検証と1年次のコンピュータリテラシー教育”, 信学技報, ET2008-6 (2008).
- [4]森 幹彦, 池田 心, 上原 哲太郎, 上原 哲太郎, 喜多一, 竹尾 賢一, 植木 徹, 石橋 由子, 石井 良和, 小澤 義明, “情報教育に関する大学新入生の状況変化 -京都大学新入生アンケートの結果から-”, 情処論, Vol.51, No.10 (2010).
- [5]石崎 龍二, “福岡県立大学人間社会学部新入生の入学時のコンピュータスキルとコンピュータリテラシー教育”, 福岡県立大学人間社会学部紀要, Vol.18, No.2 (2010).
- [6]君田 和子, “都留文科大学における情報教育の現状と提言 -学生アンケートからの考察-”, 都留文科大学研究紀要, No.65 (2007).